［二〇一五年度卒業論文題目］

石原唯「古代寺院の基壇―畿内と中部地域の比較から―」
伊藤早紀「古代・中世の鈴鹿山における山賊について」
中島しおり「中世における絵師の生活―室町時代の記録を中心として―」
伊藤のぞみ「木曽三川流域の社会特質―近世美濃国高須輪中を中心に―」
竹村友希「明治期『伊勢新聞』に見る社会的没落者の様相
　―自殺・行倒れを中心に―」
中村萌「紀州藩尾鷲組における家族の諸形態」
長谷部湧斗「近世伊勢商人の為替送金の実態」

［二〇一五年度修士論文題目］

雨皿悠佳「近世から近代にかけての地域医療の変遷過程」
橋本好史「近世・近代の鳥羽志摩地方における芸能興行の実態と変遷
　―歌舞伎・人形芝居を中心として―」

［編集後記］

今の学生たちにとって、スマホのない生活など考えられないであろう。だが、このツールが一般化したのは精々この五、六年のことである。そしてこれにより「ガラケー」などと揶揄され放逐されつつある携帯電話ですら、普及したのはほんの二十年前のこと。その前にポケベルという器具があったことなど、若い世代は知らないに違いない。誰しも持つような生活道具が、短期間でどんどん変わっていく。そしてそのスピードは加速度を増している。確かに通信手段の発達は、私たちの生活を便利にした。だが便利さの「進歩」は、いったいどこまで行くのであろうか。その前にその便利さは、本当に私たちが求めているものなのであろうか。いつでもどこにでも連絡が届くというのは、私にはそら恐ろしく感じる。

パソコンのOSもソフトも、数年毎にバージョンが変わり、不具合を避けるためには更新しなければならない。その度に新たな機能が付け加わったことが宣伝されるが、いらぬお節介と感じることも少なくない。新しいシステムは、確かに現象的には便利になっているのであろうが、それに慣れるまでのエネルギーを別の作業に費やしたいと思う。機械はどんどん変わっても、人間は簡単にはバージョンアップしないのだから。だが、言うなれば「便利さの押し付け」は果てしなく続き、しかもそれに抗うことは容易ではない。

そう遠くない時期に、スマホも「ガラケー」同様に追い遣られる時が来るはずだ。SNSも、新しいものが次々に現れては消えているようだ。こうした現象は、例えば何世代にも受け継がれ、使われ続ける伝統的な民具の世界の対極にある。縄文人たちの生活様式は、何百年、何千年と変わらなかった。江戸時代の農民たちが日々の生産活動のなかから新しい農具を開発するのに、どれほどの時間を費やしたか。だが、自ら格闘した長い時間ゆえに、その道具は人びとの掛け替えのない財産となり、富と幸福をもたらし、新しい生活文化を生み出した。現代の押し付けられた便利さは、私たちを幸せにしているのだろうか。

外部から強制された絶えざる「アップデート」が、私たちをどれほど蝕んでいることだろう。物事の本質を見えにくくさせていることだろう。便利さを疑う感性を持ちたい。その欠如が、伝統的な文化財や歴史学、人文系学問の存在を否定する感覚につながっているように思われてならないのだ。

歴史研究とは、過去から現代を問い直す学問である。私はそもそもが電話嫌いなこともあり、「ガラケー」しか持たず、それも出張時などの発信用限定で、普段は電源を切っている。連絡が取りにくいとよく文句を言われるのだが、歴史を学ぶ者としての現代社会に対する、恐らくは多分に子供染みた、ささやかな抵抗なのである。　（つ）

三重大史学　第一六号
二〇一六年三月三一日発行
編集・発行　三重大学人文学部考古学・日本史・東洋史研究室
〒五一四―八五〇七
三重県津市栗真町屋町一五七七
TEL：〇五九―二三二―一二一一（代表）
FAX：〇五九―二三一―九一九九（共同）
MAIL（山田雄司）：yyamada@human.mie-u.ac.jp
印刷　伊藤印刷株式会社（津市大門三二―一三）